

30年前に起きた“欠乏”から“過剰”への変化

農業界では、いまだに1970年の減反開始を不幸の始まりであったかのように語る人々がいる。しかし、1960年代後半から1970年前後の時代こそ、日本が大転換をしていく時代であった。それは、“欠乏”

あるいは“飢え”の克服を国家の最大テーマとした時代から、人々の健康だけでなく社会の病理としても欠乏よりも対応の困難な“過剰”の時代に転換する時代であったのだ。

年代記で言えば、1964年（昭和39年）の東京オリンピック開催に合わせて東海道新幹線が開通した。首都高速道路、東京モノレールが開通したのもこの年だ。その前年（1

963年）には日本で始めての高速道路として名神高速道路が開通していた。今こそ日本はODA大国と言われるが、東海道新幹線は世界銀行からの融資によって建設された。日本はそういう国だった。

1970年というところ、1960年代末に全国に広がった学生運動あるいは政治の季節と言うイメージがある。しかし、当時の学生運動のシンボルでもあった東大安田講堂が1969年の1月に機動隊の手によって封鎖解除させられ、1960年代の

“政治の季節”は一気に冷めていった。1970年に日米安保条約が自動延長されると、世の中の学生運動に対する共感も消えていった。

江刺の稲

「江刺の稲とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。『江刺の稲』の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

本誌編集長 昆吉則

政治の季節は終わってしまったのだ。むしろ、1970年（昭和45年）という時代を象徴している国家的イベントは大阪万国博覧会だった。オリンピックの開催と万国博覧会開催は、日本が文字

通り先進国の仲間入りをする通過儀礼だった。同時に、それは日本が欠乏から過剰の時代に突入する時代の幕開けだった。

我が国が諸外国からの緊急食料援助を受けるための基礎資料を得るという目的で1945年に始まった厚生省「国民栄養調査」でも、1970年代になると栄養不足は著しく改善されていた。しかも1970年代初めをピークにして、以後、日本人の摂取カロリーは減り続けているのだ。

ファミリーレストラン「すかいらーく」が一号店を開店したのも1970年であり、ファーストフード店のケンタッキーフライドチキン、ミスタードーナツが開店したのも1970年だ。マクドナルドは1971年に日本法人ができていた。牛井の吉野家は1968年に始まっていた。冷凍食品の普及もこの時代からである。

カルビーの松尾雅彦社長によると、同社のかっぱえびせんが売れ始めたのも1972年頃からだと本誌の座談会で話しておられたが、その時代から、日本人にとって、甘さが美味さ

である時代は終わり、子供たちも“軽い塩味”を喜ぶ時代になった。

そして、1970年に生産調整（減反政策）が始まった。

我が国の米生産は食糧管理制度のもとで1960年代後半になると一貫して生産過剰な状態が続いていた。欠乏の時代を象徴するといってもよい食糧管理制度は、1995年まで存続したのだ。その間、食糧制度は農業界に利権的恩恵をもたらし続けてきたが、我が国の農業経営と農家の精神を金縛りにしてしまった。むしろ、ソ連が70年間という長すぎるイデオロギー支配の国家制度のために、今だに経済社会のリハビリ過程にいるごとく、農業界の精神のリハビリはまだ必要なようだ。政策的な変化はあっても、我々は、人類が経験したことのない“欠乏”の時代から“過剰”の時代へと歴史の変化の中にいることを、もつと深く考えるべきではないか。

世の中、そして世界はもう待つてはくれないのだ。そして、そんな変化の中で自らパラダイムの転換ができる者にとっては、日本の農業が置かれている状況とは、歴史上でも農業にその可能性が与えられている時代でもあるのだ。